

2005年6月1日発行

日本顎顔面補綴学会

Japanese Academy of Maxillofacial Prosthetics

Newsletter No. 1

Maxillofacial Prosthetics

発行人 谷口 尚

編集 広報委員会

事務局 T135-0033 東京都江東区深川2-4-11 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

Tel : 03-5620-1953 Fax : 03-5620-1960

E-mail : max-service@onebridge.co.jp

Quality of Life 向上への貢献を目指す学会活動へ

日本顎顔面補綴学会第6代理事長に再選された谷口 尚先生のプロフィールと所信さらに学会活動を牽引される各委員会の委員長の活動方針を紹介いたします。

理事長挨拶



日本顎顔面補綴学会

理事長 谷口 尚

略歴

昭和54年 東京医科歯科大学歯学部卒業

昭和59年 東京医科歯科大学大学院歯学研究科（顎顔面補綴学専攻）修了

平成元年 東京医科歯科大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部講師

平成2年 米国イリノイ大学 Visiting Assistant Professor

平成11年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授

平成16年 東京医科歯科大学歯学部附属病院副病院長

平成16年 東京医科歯科大学学長特別補佐

ご挨拶

本年1月より理事長に再任されました。前期2003年から2004年の2年間では、本学会が顎顔面補綴関連で組織化された団体として世界で最大の会員数を有していること、また、本学会の主要な構成メンバーが歯科補綴科医と口腔・顎顔面外科医であり、これに関連分野の研究者・臨床医が加わり、有機的連繋をもって活動がなされていること、さらには、2002年の本学会第19回総会が第5回国際顎顔面リハビリテーション学会との合同シンポジウム形式で開催できたことを契機に、本学会が国際学会において果たすべき役割も今後益々大きくなると思われます。このことから本学会員の国際顎顔面リハビリテーション学会への団体会員登録を検討して参りましたが、引き続き検討し実現できるよう努力したいと存じます。また、広報委員会を再度立ち上げ、社会に対して学会の活動内容を積極的に広報し、多様で迅速な医療サービスが提供できるような環境を整備し、会員相互の情報交換の場とするため、学会ホームページを開設いたしました。今後内容の充実を

図るとともに、国際化への対応のため英語版を準備していきたいと思います。

本年4月1日より施行されました個人情報保護法への対応は社会全体の課題となっておりますが、本学会におきましては従来にも増して慎重な活動を要求されるものと考えます。特に、学会機関誌の電子出版化が推し進められている現状、また、投稿論文数が減少傾向にある現状を踏まえますと、本学会誌の今後の発行について新たな視点を加えて再確認する必要があります。現在、機関誌「顎顔面補綴」をB5版からA4版変形(国際版)に変更する作業を行っておりますが、引き続き学会誌の充実、改善に努めて参りたいと思います。

本学会の使命は重篤な機能障害を抱える患者の方々の Quality of Life の向上への貢献に集約できます。この使命を果たすべく事業活動を展開し、学会発展に向けて努力する所存ですので、引き続き、会員の皆様のご支援、ご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます。

委員会活動

学術委員会

委員長 清野和夫(奥羽大)

委員 沖本公繪(九大), 古谷野潔(九大), 佐藤淳一(鶴見大), 佐藤裕二(昭和大), 松浦正朗(福歯大), 水城春美(岩手医科大)

幹事 山森徹雄(奥羽大)



<今期活動方針>

学術委員会は教育研修会の開催と優秀論文賞の審査を主な活動としています。教育研修会は将来の顎顔面補綴治療を担う若手研究者の育成を目的として開始さ

れましたが、回を重ねるごとに最新の治療法の紹介やテーマに対する問題点の抽出等の役割も加味されるようになりました。第10回教育研修会は、第22回総会(石上友彦総会長)時に開催されます。メインテーマは「舌の再建」で、座長は水城春美先生が務め、川口浩司先生(鶴見大), 鈴木規子先生(昭和大), 隅田由香先生(東医歯大院)を講師として舌の再建と後遺する機能障害および補綴による機能回復について講演とディスカッションが行われます。多くの会員が参加されることを願っています。また、優秀論文賞は本学会が目指している領域における学問と技術の発展・充実に寄与する優れた学術論文の著者に与えられます。学会誌に掲載された多くの論文のなかから選考できることを願っています。

編集委員会

委員長 鈴木規子(昭和大)

委員 大貫昌理(鶴見大), 尾澤昌悟(愛院大), 小野高裕(阪大), 久保吉廣(徳大), 後藤昌昭(佐賀大), 塩入重彰(横浜医療センター), 水城春美(岩手医科大)

幹事 隅田由香(東医歯大)



<今期活動方針>

1) 雑誌サイズおよびレイアウトの変更

今期の活動として最重要課題は「1巻2号(1978年)」から現在まで26年間続いて来ました従来の

B5版雑誌の変更です。2月28日の理事会で雑誌サイズ変更の承認を得てから編集委員会として早急に検討を行い、従来のレイアウトをそのままにA4変形版(国際サイズ)への変更を試みました。その結果、急遽28巻1号から新しいサイズの雑誌を会員の先生方にお送りできることになりました。今後さらに表紙、内容構成、投稿規定などに改善を加える予定です。会員の皆様の活発な

ご意見をお願いいたします。

2) 投稿規定の変更

28巻1号の投稿規定の一部を訂正しましたが、今後も投稿方法の変更などについて検討する予定です。

3) 投稿論文数の増加

従来からの懸案である「投稿論文数を増やす工夫」を継続致します。

内容に新規性と普遍性がみられる症例報告については原著論文として採用するなど投稿規定の変更を検討中です。

国際交流委員会

委員長 石上友彦（日大）

委 員 尾澤昌悟（愛院大）、菅井敏郎（菅井歯科口腔インプラントセンター）、隅田由香（東医歯大）、向山 仁（横浜市立みなと赤十字病院 歯科口腔外科）



<今期活動方針>

1. 前委員会の引継ぎとして、ISMR 団体会員登録の交渉を行うこと、米国顎顔面補綴学会（AAMP）との交流を深める。

2. ISMR と AAMP と

AAA (American Anaplastology Association) のホームページや情報を広報委員会を通じて会員に開示する。

3. AAMP の学術大会への参加および AAMP からの JAMP 学術大会への参加交流を推進する。我々の JAMP は先人達の功績のおかげで、国際的に見ても、この領域においての学会としては大勢の会員を有し、活発に活動していると自負しております。しかし、さらに学術的な進歩・発展や治療技術、材料開発のためにも、英語圏での広報活動が必要であると考えます。現在、ISMR の 2 年に 1 回の学術大会には大勢の会員も参加し、交流を深めていますが、今後は AAMP, AAA と

も交流を行うと共にアジアにも目を向けて情報を収集しながら、日本発の Maxillofacial Prosthetics を国際的なネットワークに乗せたいと思います。また、早急に情報収集が必要な事項としてエピテーゼ材や顔面インプラント材等、種々の顎顔面補綴材料があります。日本の薬事法などもあり、困難な状況であります。情報を集め、より良い治療のために本委員会がその一助となることを祈念しながら活動をしていきたいと考えています。

広報委員会

委員長 沖本公繪（九大）

委 員 伊藤創造（岩手医科大）、松山美和（九大）、
山森徹雄（奥羽大）

幹 事 諸井亮司（九大）



<今期活動方針>

本学会の広報活動として、前委員会がホームページを立ち上げたことに引き続き、今期委員会では、会員相互の情報交換に加え、対社会、対国民に本学会の活動内容等の情報を提供する役割を担うことを活動目標とします。

広報活動の一環として、ニュースレターの発刊が理事会で承認され、学会誌冒頭に綴じ込みの形（切り離し可能）で年間 2 号を、会員の皆様にお届けいたします。執行部の学会運営・活動方針のほか、顎顔面領域における最新トピックや研究活動の動向などを、海外情報を含めてお知らせ致します。さらに会員の皆様に興味を持って読んで頂けるような情報発信を心掛けたいと思います。

ホームページの更新では、会員に対する情報の充実に加え、一般の方々がアクセスし、「顎顔面補綴医療」をより理解していただくためのページを新たに立ち上げることを検討したいと考えています。

用語検討委員会

委員長 大畠 昇（北大）
委 員 石島 勉（北医療大）、後藤昌昭（佐賀大）、
佐々木啓一（東北大）、野村隆祥（鶴見大）、
オブザーバー 小野高裕（阪大）、塩入重彰（横浜医療センター）、鈴木規子（昭和大）、谷口 尚（東医歯大）

機構検討委員会

委員長 後藤昌昭（佐賀大）
委 員 石橋寛二（岩手医科大）、久保吉廣（徳大）、
下郷和雄（愛院大）、田中貴信（愛院大）、
谷口 尚（東医歯大）、松浦正朗（福歯大）、
水城春美（岩手医科大）



<今期活動方針>

機構検討委員会では、一昨年より懸案事項となっておりました学会名称に関して討議を続けております。これまでの顎顔面補綴学会の活動範囲を考慮すると、顎顔面形態の回復から咀嚼、嚥下、発音機能の回復までを扱っており本学会が頭頸部疾患の治療の一翼を担っていることは明かです。したがって口腔顎顔面リハビリテーションと言う名称が相応しいという意見も当然のことであります。一方、口腔顎顔面リハビリテーションの中で顎顔面補綴装置の果たす役割は重要であり、本学会は顎顔面補綴装置を適切に製作することができる技能集団であるととらえ、顎顔面補綴学会という名称を存続させるべきとの考えもあります。学会名が変りますと学会雑誌の名称も変えることとなり、過去の業績が曖昧になる危険性もあります。このような事情から機構検討委員会では学会名変更の是非に関して結論を得るにいたっておりません。

本学会の歴史は、補綴科、口腔外科を中心となっ

て発展してきた経緯がありますが、最近の演題発表を見てみると、口腔外科の本学会での活動が低下しているように思われます。発足時の先生方が退かれた後に続く口腔外科医の会員が減少している影響かもしれません。補綴に関してもインプラントが盛んとなり従来の咬合やアンダーカットを利用した補綴装置は旧式のように思われる傾向があります。人工材料や再生医学による新しい手法も積極的に取り入れなければなりませんが、顎顔面補綴装置の基本は昔と比べて変化しているはずはありません。

本学会活動の主目的は、口腔外科と補綴科のチームアプローチによって歯科でしかできない口腔顎顔面リハビリテーションを確立し、耳鼻科、形成外科、言語、看護の専門家に理解してもらうことです。技術の向上と共に広報にも力を入れなければならないと実感しています。

受賞者の声

平成15年度優秀論文賞を受賞して



伊藤 創造

岩手医科大学歯学部
歯科補綴学第二講座

「放射線照射の骨牙細胞に対する影響 純チタン表面での初期石灰化について」

この度は優秀論文賞をいただきましてたいへん光栄に思っています。また、選考して頂いた先生方に感謝申し上げます。

顎顔面補綴を必要とする患者さんたちに接するにつけて補綴装置の維持固定にインプラントを応用できれば、この患者さんのQOLはもっと向上するであろうという思いは常にもっていました。インプラント治療を行い顎顔面補綴装置がしっかりと装着され社会復帰した患者さんはある程度

満足を得ていると思われます。しかし、様々な条件からインプラント治療を躊躇せざるを得ない状況も多々あると思います。経済的な条件や他の受療条件でインプラント治療が出来ないこともあるでしょうし適応症から難しいと判断される症例もあると思います。この研究は、一部ではありますがその適応症の条件設定に少しでもお役に立てるデータが提供できればはじめたものです。放射線照射された骨組織の条件からインテグレーションを考えるために、手始めに細胞レベルで放射線量とチタン上での初期石灰化の関係を調べてみました。現在も次の段階として可能な限り臨床に近い設定で研究できるよう試みています。まだまだ皆様の臨床に直接お役に立てるところまでは至っていませんが出来る限り前進し患者さんのQOL向上につながるところまで到達したいと思っています。

* 次号受賞者の声

平成 16 年度優秀論文賞

島崎伸子（奥羽大）

「関節突起を含む下顎切除後の顎偏位に対する補綴的機能回復」

の方向性を決めてくれた論文が本学会誌にあります。夏の学術大会をされた松浦正朗大会長が 1981 年に執筆された「義顎装用者の簡単な咀嚼能の測定法について」という論文です。これは総義歯で名高い山本為之先生の総義歯性能判定表を科学的に検証し、改良を加えたものです。この論文を読ませて頂き、ニアーサイドでの医療技術評価を行うという今の研究に着想し、研究を続けてきました。

今回、学術大会には初めて参加させて頂いたのですが、従来の学会の派閥や序列にとらわれず、活発なディスカッションが行われていたことには深く感銘致しました。学会で質問をするのが趣味の私でさえあまり質問ができないほどの活気でした。口腔外科、補綴、インプラントなどの各分野の専門家が、患者さんの幸福のために領域を超える力を合わせ、また、競争して、臨床技術や基礎科学の向上に繋げようとするすばらしい学会であると感じました。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

＊＊＊

《「コンプリート・コラージュ法」開発のエピソード》

薄木 省三

防衛医科大学校歯科口腔外科

パーソナルコンピュータとプリンタが普及し、デジタル画像を手軽にしかも写真のように印刷できるようになった。筆者らはこうした印刷法をエピテーゼ製作に応用した、「プリント・コラージュ法」を開発した。「プリント・コラージュ法」とは、患者の写真をもとに画像編集ソフトで修復・加工して得られた画像データを、直接布地に印刷したものをお玉に組み込んで、患者の微細な個性的な顔色を反映させる製作方法で、内部着色法の 1 法である。本法の概要を、第 18 回日本顎面補綴学会総会で、詳細な内容を顎面補綴誌 24 卷 2 号 25 ~ 31 ページに掲載した。また、指プロテーゼに応用した例を第 5 回国際顎面リハビリテーション学会で発表した。本稿では、印刷

会員の声

《学会新規加入雑感》

佐藤 裕二

昭和大学歯学部高齢者歯科

私は本学会に昨年夏の福岡での学術大会の際に加入させて頂きました新人です。加入早々、学術委員会の末席に加えて頂き、非常に光栄に思っております。前任地の広島大学では顎顔面補綴に関与することが少なかったのですが、3 年前に昭和大学に赴任してからは多くの症例に関与しなければならなくなつたため、あらためて勉強させて頂くために加入させて頂きました。

しかしながら、私は本学会のことは 20 年前から注目していました。私が感銘を受け、私の研究

業界ではすでによく知られている事柄ではあるが、「プリント・コラージュ法」を成功させるのに不可欠な、カラーマネージメント（今回は、モニタとプリンタの関連に限局して）について述べる機会としたい。

モニタ上で欠損部を色調再現も含めて画像を構築・再現するのはさほどむずかしくなく、その印刷するのはさらに容易いが、印刷された画像は、アプリケーション、プリンタ、各メーカーから支給されている印刷設定を駆使しても、モニタで見ている色調と一致しないが、カラーマネージメント専用ソフトを用いると簡単にできる。逆に、これを用いないと、暗中模索をしなければならず、色調が一致する保証はない。

当科では、グレタマクベス社製「i1Pro with i1 Match」（日本販売代理店 株式会社恒陽社）というソフトを用いて重宝している。これはカラーマネージメントセットで、専用の分光光度計や分析用のターゲットチャート、自動プロファイル作成ソフトがすべて付属しており、使用的するモニタやプリンタの、また、印刷用紙別のプロファイルが簡単かつ自動的にできる。これを導入することにより画像構築から印刷まで見ている通りのイメージを得ることが可能になる。

臨床例において、プリンタプロファイル作成時の工夫した点。

「プリント・コラージュ法」では印刷対象が布であり、最終的には、表面をクリアーシリコーンでコーティングする。それで、プリンタプロファイルを製作する時のターゲットカラーチャート（付属ファイルに納められている、基準となるカラーパッチの見本）を、布（用いるのと同質の）に印刷、乾燥後、その表面にクリアーシリコーンを一層塗布し、硬化させた。それを指示にしたがって付属の分光光度計で計測し、プリンタプロファイルを作成した。このようにして、最終完成時に色調が一致するプリンタプロファイルができるよう工夫した。

印刷時は、そのプリンタプロファイル（YMCK プリンタファイル）を印刷条件として選択しておこなった。

<プリンタについて>

熱転写型よりもインクジェットプリンタが布地印刷にはよかったです。ポストスクリプト対応で、RIP（RGB-YMCK 変換）機能のついたプリンタが適当である。インクは顔料系がよく、染料系に比し退色性に勝っている。

<印刷対象の生地について>

本法用に試した生地には、これまでシリコーン膜はじめ、ナイロンストッキング、弾性包帯など、10 数種類をかぞえるが、現段階では、本法には白色の綿布が最適と考える。生地の織り目の粗さはアンダーシャツかワイシャツの生地ぐらいのものが実用的であった。発色もよく、安定で、滲まず、シリコーン材と調和する伸びが得られた。

着色法やモールドをさらに改善すれば、個性的な皮膚色が求められるエピテーゼや指プロテーゼの製作は、現在のポーセレン焼付けクラウン製作で見られるようなレベルの予知性と完成度を確立することが可能になるとを考えている。

＊＊＊

《プライバシーのモンダイ》

佐渡 忠司

佐渡歯科クリニック

本年の4月1日よりいわゆる「個人情報保護法」が完全施行され、5000件以上の個人情報を保有する事業者はもちろんのこと、これに該当しない多数の事業者も同じ様な努力義務を負うことになりました。当然ながら医療施設もプライバシー権と個人データのモンダイについてあらためて考えざるを得なくなりました。ただし、ここで法律の良否について語るのは本意ではありません。

かつて自分が勤務したことのある病院歯科・診療所の大部分は、オープン・セミオープンスタイルであり、診察室内や出入りの際に患者が互いに顔を合わせ、また互いの声に耳を傾けることができる（傾けざるを得ない）構造でした。多くの人は、医療者も患者も含めて、その事に疑念を持たず、むしろそれが当然のようにさえ思いこんでいるように感じました。たまさか疑問を抱いたとし

ても「シカタガナイ」と納得していたのですが、「プライバシーを守りうる環境」で診察をする事自体、いかにも特殊な環境と考えられていたように思います。

自分が顎顔面補綴の治療を始めことになったのもそんな時代でした。教育病院ということもあり、多くの医療者・学生が行き来する広い診療室で、申し訳程度のカーテンを引いて治療を行うわけですが、さすがにエピテーゼを扱うときは、簡単な扉で仕切りされた「特別室」をあてがわれました。なるほど「プライバシー」は保たれています。おまけに、患者との心理的距離は否応なく近づき、ラポール形成に寄与さえします。しかし「顎顔面補綴だけが特別な治療なのだろうか。一般的な歯科診療においても、治療自体に対して大きなストレスを抱えながら、なお無防備なカラダを晒さなければならることに、誰しもが大きな抵抗を感じているのではないだろうか。」

そんな思いを抱きながら十数年の勤務医生活を続けましたが、疑問はますます膨らみ、いよいよ自らの診療所を作ることとなった時、最初に決めたことは個室診療、全ての患者に「特別室」を提供する歯科医院でした。もちろん「プライバシー権」の問題は診療室を個室にしたからといって解決されるわけではありません。けれども個室診療のシステムを選んだことで、患者とのコミュニケーションに多くの時間を割くようになり、結果として「患者の権利」を再考する契機になったのは間違ひありません。

学会で諸先輩方にお会いすると、「クリニックの調子はどう?」とよく尋ねられます。個室診療は多くのデメリットがあり、決して楽ではありません。青息吐息ではありますが、理想の一つが叶えられました。それだけでも開業したことに大いに満足しています。お答えになりますでしょうか?

次回学術大会案内

第23回学術大会および総会

日 時：平成18年6月23日(金)24日(土)

総会長：久保吉廣(徳島大)

場 所：長井記念ホール(徳島大学薬学部)

関連学会案内

国内学会

第18回日本顎関節学会総会・学術大会

日 時：平成17年7月30日(土)31日(日)

会 場：くにびきメッセ(松江市)

大会長：吉村安郎(島根大学医学部)

<http://www.pd-see.com/18jstmj/index.html>

第35回日本口腔インプラント学会総会・学術大会

日 時：平成17年9月17日(土)18日(日)

会 場：弘前市民センターほか(弘前市)

大会長：木村博人(弘前大学医学部)

<http://www.jsoi2005.umin.jp/>

第114回日本補綴歯科学会学術大会

日 時：平成17年10月1日(土)2日(日)

会 場：朱鷺メッセ(新潟市)

大会長：河野正司(新潟大学大学院)

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/prosth1/jps/>

第50回日本口腔外科学会総会

日 時：平成17年10月24日(月)25日(火)

会 場：大阪国際会議場(大阪市)

大会長：覚道健治(大阪歯科大学)

http://www.jsoms.or.jp/2_01.html

Newsletter No. 1

Maxillofacial Prosthetics

国際学会

4th Biennial Congress of Asian Academy
of Prosthodontics

Aug 9-11, 2005, Bangkok, Thailand

<http://thaiprosth.org/aap2005congress/>

20th Annual Conference of the American
Anaplastology Association

Sept23-25, 2005, San Antonio, Texas USA

http://res-inc.com/aaa_2005.htm

53rd Meeting of the American Academy
of Maxillofacial Prosthetics

Oct 22-25, 2005, Los Angeles, CA USA

<http://www.maxillofacialprosth.org>

7th International Congress on Maxi-
illofacial Rehabilitation

Oct 28-30, 2006, Maiami, Florida, USA

<http://www.ismr-org.com>



<第22回日本顎顔面補綴学会総会開催>

会期 2005年6月16日(木)~17日(金)

会場 日本大学会館

総会長 石上 友彦 (日本大学歯学部補綴学教室
局部床義歯学講座教授)

特別講演

「口腔癌のリハビリテーション」

植田耕一郎 (日本大学歯学部摂食機能療法学
講座教授)

教育研修会

テーマ「舌の再建」

コンテンツ

Quality of Life 向上への貢献を目指す	
学会活動へ 理事長挨拶	1
委員会活動	2
受賞者の声	4
会員の声	5
次回学術大会案内	7
関連学会案内	7
第22回学術大会案内	8
広報委員会から	8

・学会および広報委員会へのご意見ご要望を
お寄せ下さい。

・「会員からの声」記事募集しています。

日本顎顔面補綴学会広報委員会

委員長 冲本公繪

委 員 伊藤創造, 松山美和, 山森徹雄

幹 事 諸井亮司

TEL:092-642-6371, FAX:092-642-6374

E-mail:rmoroi@dent.kyushu-u.ac.jp

〒812-8582 福岡市東区馬出 3-1-1

九州大学大学院歯学研究院 口腔機能修復学講
座 咀嚼機能制御学分野